

「村なかに おかげまいりの

石灯笼」

「おかげ参り」は、江戸時代に始まった伊勢神宮への参詣のことで、旅支度の準備も何もない者が沿道の人々の施しに頼ってお参りしたことからのように呼ばれています。また、奉公人や子どもが主人、親に無断で参詣していたことから「抜け参り」とも呼ばれています。

この伊勢神宮参詣は数百万人規模になるもので、ほぼ60年周期で慶安3年（1650）、宝永2年（1705）、明和8年（1771）、文政13年（1830）に起こりました。その中で最も盛況を極めたのが文政13年のもので、3カ月の間に当時の日本の総人口約3228万人のうち約500万人が参詣したとされています。



天保2年（1831）に建てられた古提街道沿いの「おかげ灯笼」（諸福1丁目）

なぜこのような現象が起きるのかは不明ですが、庶民の移動に厳しい制限があった当時、伊勢神宮参詣が理由であれば、どのような行程でもあまり問題にされず、参詣を済ませた後に京や大坂などの見物を楽しむ者も多かったようです。「おかげ参り」が庶民の旅行としての娯楽的要素であったことも大きな要因と考えられます。

その「おかげ参り」を記念して建てられた「おかげ灯笼」と呼ばれる石灯笼が、市内にも残されており、文政2年（1819）に建てられた寺川のおかげ灯笼のほか、最も盛況であった文政13年の「おかげ参り」を記念し、「太神宮」などと刻まれた灯笼がその年や翌年に諸福、灰塚、御領、三住町、中垣内の地域にそれぞれ建てられています。

また、慶応3年（1867）に発生した「ええじやないか」に関する記念灯笼が栄和町と龍間にそれぞれ残されています。

（生涯学習課）